



母より大きな先生像

松本 侑壬子・ジャーナリスト

今年（2008年）96歳の現役映画監督、新藤監督の最新作は、「わたしの小学校の体験談」である。教育の荒廃が、ついに教師の職が教育者自身の手で金でやり取りされるところまで来た現在、この映画で描かれる、終生子ども（教え子）とともにあったかつての教師像に改めて心揺さぶられる。

自分自身の子ども時代を思い出しても、女学校教師だった父親の教育一筋、清貧の思想の具現のようなピンボケな家庭生活だったが、父が退職してからでもすっかりおばあちゃんになったかつての教え子たちがよく自宅を訪ねて来られた。この映画の主人公のような、教え子に終生慕われた教師は、かつては全国至る所に実在していたのであろう。

大正の終わりごろの広島県の田舎町。石内尋常小学校5年生の担任は市川先生（柄本明）だった。クラスには主人公・良人、みどり、三吉がいた。授業中に三吉が居眠りをして、それは前日遅くまで田植えを手伝っていたためだとわかると、先生は叱らない、良人の母親が亡くなった時には、一緒に泣いてくれた。良人の家は倒産し、みどりは心配してくれたが、卒業すると良人は町を離れ、みんなも離別した。言葉には出せない思いを胸に、自転車に2人乗りして故郷の山

河に埋まるように立つ小学校の校庭をゆっくりと一周する良人とみどり。それが幼い別れだった。

新藤監督の実体験を自身でシナリオ化した本作は、懐かしく切ない思いのあふれた作品だ。主人公の市川先生は、定年後、長年勤めた学校前の借家に移り住み、毎日子どもたちの声を聞くのを楽しみにしていた。しかし、学校の教職員も代替わりし、在り方も変わり、懐かしさから思わず校庭に入った先生は警備員や教員に見咎められて追い払われる悲哀も味わう。しかし、人間味あふれる先生との幸せな思い出は、良人やみどりらかつての同級生たちにとってはかけがえのない心のよりどころである。

卒業30年後、東京で売れない脚本家になっていた良人（豊川悦史）の元に、村の収入役になった三吉（六平直政）から先生の定年祝いの知らせが届く。会場はみどり（大竹しのぶ）が女将をしている料亭。戦争をはさんで同級生らは、原爆被爆、戦争未亡人など経てきたそれぞれの道のりを語り、良人はその迫力に圧倒され、自らのふがいなさを噛みしめるばかり。その夜、みどりから、30年前なぜ黙って村を去ったのか、自分は何年も便りを待っていたのだと詰め寄られるが…。

コミカルな場面もふんだんにあり、笑いと涙の中に、しみじみと人の一生の中で教育とは何かを問いかける。監督70年の映像作家活動のすべてを注ぎ込み、少年時代から新進気鋭のシナリオライターとして自立するまでを描く。

新藤作品には、母親への思慕を映像化した自伝的作品が多いが、恩師像について、小学校に入ってから「お母さんより大きな先生」が現れ、「いつまでも心に残るピカピカする光で自分の人生に強い影響を与えた」と語っている。素朴でお人好しでいつも子どもたちを見守っていた先生の発するピカピカは、決して「金銭」の光ではなかったはずである。

『石内尋常高等小学校 花は散れども』

日本映画（118分）／新藤兼人監督

9月27日より、シネカノン有楽町1丁目他全国順次公開

© 2008「石内尋常高等小学校 花は散れども」製作委員会

